

1. 研究者になろうとしたきっかけ

医師になって最初に、亡くなった患者さんを診させていただいた時というのは、とても記憶に残るものですが、一つの臓器だけが、ダメになってしまうと、生命が維持できない病気の状態と言うのは、存在するものです。研究を進め、人工臓器の開発が進めば、命を長らえ、QOL や、予後が、改善することができる患者さんは、たくさんいるはずなのです

2. 助成研究の内容紹介

舌がんの切除術後は、残念ながら、飲み込みの機能が損なわれてしまう患者さんも、いらっしゃいます。東北大学には日本で唯一つの「大学院医工学研究科」を有しており、様々な人工臓器技術の蓄積がありますので、大学病院とも共同で「植込型人工舌」の発明に至りました

3. 2の将来に繋がる結果予想・目標

舌がんの手術後は、現在、遊離筋皮弁などによる再建手術が行われていますが、なかなか大変な手術で、患者さんの侵襲も負担も、小さいとは言えません。もし、「人工舌」が存在すれば、手術は簡便になり、高齢者への適応などの展開も見えてくると期待されます

4. 全国のRFL関係者に一言

いろいろな分野で、様々な医療テクノロジーが発展しています。

今日は、治せない患者様でも、明日は、新しい展開があるかもしれません